

---

# 世界の絆

べあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界の絆

### 【Nコード】

N2094R

### 【作者名】

べあ

### 【あらすじ】

運命を変える力を、人は奇跡と云うのだろう。

しかし奇跡は一つとして特別なモノでなく、今この瞬間にだって、誰にでも起こっているのである。

何故なら、奇跡は偶然と偶然が結びついて起こった、ただの偶然なのだから

この退屈な世界に刺激を求め、時々学校を休んでは誰もいない静かな時間をゆっくりと過ごす。

そんな彼女、優奈はある日別世界へと召喚される。  
そこに居たのはピエロのお面にほどけかけの包帯、腰まで届く漆  
黒の髪を携えた一人の少女であった・・・

(1) そしてまた、退屈な毎日が始まった。(前書き)

そしてまた、退屈な毎日が始まった。

(1) そしてまた、退屈な毎日が始まった。

運命を変える力を、人は奇跡と云うのだろう。

しかし奇跡は一つとして特別なモノでなく、今この瞬間にだって、誰にでも起こっているのである。

何故なら、奇跡は偶然と偶然が結びついて起こった、ただの偶然なのだから。

閉め切ったカーテンの隙間から、太陽の光が漏れている。

黒い髪を肩まで垂らし、その少女は安らかな眠りに落ちていた。

「優奈、ご飯よ」

ふいに、部屋のドアがノックされる音と共に気弱そうな女性の声  
が、彼女、優奈の耳に届いた。

「ん・・・置いて・・・」

寝起きでやる気の無さそうな声で優奈は母親を追い返そうとする。

「早く食べないと学校遅刻しちゃうわよ？」

「今日はいい。行かない」

「・・・そう」

優奈は、時々何もないのに学校を休むことがあった。明るい性格である優奈は友達関係も良好で、どちらかと言うと皆のリーダー的存在である。いじめなどで登校拒否をしているわけではなさそうだ。高校生だから義務教育でもないし、優奈は成績も問題ない。故に母親は無理に優奈を学校へ行かせはしなかったが、どうも優奈が学校へ行かない理由が気になった。

そして今日、優奈の母親、香織かおりはある事を決心した。

「優奈、ちょっと話があるの。後で下に来なさい」

有無を言わさぬ口調でそれだけ伝えると、彼女はその場から去って行った。

「・・・」

優奈はしばらく、まだ覚めきっていない目を擦っては欠伸をし、ぼろっと壁を見つめていた。

「うしっ」

変な気合を入れてふいにベッドから飛び降りると、バツとカーテンを全開にし、両手を組んで上に上げ、長い伸びをしてから服を着替えた。

「お母さん、話って何々？」

階段を降りてリビングへ向かい、テレビをつけて朝食を食べ始める。母親の焼いてくれたトーストとベーコンエッグ。

しばらくすると外に出ているらしい香織が新聞を持って戻ってきた。

(2) 親子の絆はゆっくりと育まれてゆく。

(前書き)

親子の絆はゆっくりと育まれてゆく。

## (2) 親子の絆はゆっくりと育まれてゆく。

香織は優奈の向かいに座ると、テレビを消して優奈の目を見つめた。

見ていたテレビを消された優奈は少し不満気な表情を香織に向けた。

「・・・何？」

「優奈・・・学校で、何か嫌な事でもあったの？」

優奈は香織に思ってもいなかったことを訊かれ、戸惑う。

「え、ないけど・・・?!何、私悩んでる??」

香織は優奈のその反応に一安心したが、何もないとすれば何故優奈が学校へ行かないのかが余計気になった。

「優奈・・・どうして、学校へ行かないの?何かあったんじゃないの?」

すると優奈はふうつと短いため息を吐き、

「別にお母さんには関係ないでしょ。一々そんなの訊いてこないですよ」

冷たく言い放つと食器を下げ、自室へ戻った。

後に残された香織は悲しげな目で優奈の上つて行った階段を見つめる。

「今日は何しよ・・・」

優奈はしばらく何かを考える様子を見せると、ピンクの可愛らしいリュックを背負い、再び下へ下りた。

香織が荒れた手で二人分の食器を洗っている。

優奈はその姿を見て何を思ったのか、唐突に香織の背に向けて言葉をつづけた。

「お母さん・・・私、この世界が退屈なの。だから退屈な学校にも行かない。もちろん、友達は優しいし大事だと思ってるよ?・・・」

でも、やっぱりこの世界は私には合わないみたい。私、いつも特別なモノを求めてるみたい」

「優奈……」

食器を洗う手を止め、香織は優奈を真剣な眼差しで見つめる。

「私が普段何もしてやれないから……ごめんなさい」

下を向き、小さく呟く。

「そんな、お母さんのせいじゃないよ。お母さんは女手一つで私を養っているんだから、何も頑張る必要はないんだよ」

実は、優奈には父親がいない。優奈がまだ幼い頃に、事故で亡くなってしまったのだという。

そのためか優奈は親との付き合い方がいまいち分らないらしい。いつも忙しい香織は、優奈と遊んだり出かけたりした事があまり無いのだ。

「優奈……お昼ご飯、そこに置いておくからね」

香織の表情は、心なしか嬉しそうであった。普段心の内を明かさないう優奈が、こんなにも自分に話してくれたのだ。まだ間に合う。

これから少しずつ娘との心の距離を縮めてゆこう。そう思っていた。

「じゃあ、行って来ます」

するべきことを全て終え、香織は仕事へ出かける。

「行ってらっしゃい」

こんな些細な言葉のやり取りでさえ、今の香織にはとても新鮮なものに感じられた。

(3) 退屈な現実から逃げた。(前書き)

退屈な現実から逃げた。

(3) 退屈な現実から逃げた。

香織が出て行った後の家で、優奈は一人、リビングのテーブルに置かれた皿を見つめる。

香織の手作りのサンドウィッチ。優奈は皿に張ってあるラップを一度剥がすと、取り出したサンドウィッチにそれを巻き、リュックに入れた。

「私も行きますかっ」

優奈は自分にそう言つと、家を出てしつかりと鍵を掛け、西の方向にあるとある草原を目指して歩き始めた。

「」

鼻歌交じりに歩くこと数十分。辺りは建物の気配も無くなり、どこまでも続く緑の絨毯じゅうたんが広がっている。優奈はその中の、小高い丘に登ると気持ち良さそうに一息吐いて下を見下ろした。近くには小川も流れ、とても爽快な景色である。

「ふん…涼しい…」

優奈は両手を広げてそのまま草の上に寝転がる。この時間が優奈にとつては至福の一時なのである。

ただ何もせず、澄み切った青い空を眺める。他人にとつては、こちらの方が退屈で無駄な時間かもしれない。しかし、優奈にとつては色々色々と騒々しく面倒な世界にいるのよりも、誰も居なくてのどかな夢の中なかにいることの方が刺激的なのであった。

「ふふっ」

片手を上に伸ばしていると、一羽の小鳥がその先に止まった。

「お前はいつも来るね。餌が欲しいの？」

優奈はリュックの中からサンドウィッチを取り出すと、少しだけちぎつてその小鳥へと差し出した。小鳥は嬉しそうにその欠片をつつく。

「私も食べようか」

自分も少し早い昼食を摂ると、優奈は次に丘を降りて小川の方へ向かう。小鳥も優奈の後を追う。

再び、リュックの中から次はマグカップを取り出すと、優奈は小川の水を汲んで美味しそうに飲み干した。

「そう言えば・・・この川、どこから続いているんだろ？」

水の流れに注目すると、それは今まで気にもとめなかった森の方から続いていた。

「よし、暇潰しに行ってみるか」

すると例の小鳥は優奈の周りを一周して羽ばたくと、森の方へ飛び立った。

「案内してくれてるのかな？」

優奈は優しく微笑むと、ゆっくりとのそ歩を進めた。

(4) 滝が私を別世界へ連れて行く。(前書き)

滝が私を別世界へ連れて行く。

(4) 滝が私を別世界へ連れて行く。

しばらく歩くと辺りには背の高い木々が目立ち始め、地面に大きな影を落としている。

「ん、森って感じ」

歩くにつれて少しずつ長さが伸びてゆく草に足をくすぐられ、行く手を阻む蜘蛛の巣に顔を擻<sup>しか</sup>める。それでも小川を辿り続けると、段々と川のせせらぎの音が大きくなっていくことに優奈は気づいた。そうしてついに、音は轟音と言っても過言ではなさそうなものになる。

「滝・・・？」

優奈の予想通り、川は急に太くなり、そして大きな溜まり場に続いていた。上からは滝が立派に流れ落ちている。

「うわあ、・・・！！」

このような大自然の光景を見ることは、優奈は殆ど無かった。こんな近くの森に滝が潜んでいたとは、考えた事も無かった。

木の葉の重なる隙間から、幾筋もの神秘的な木漏れ日が優奈を照らすその様も、何とも言えぬ幻想的な世界を創り出している。

「ここになら、ずっと居れそう・・・すごい気持ち良い・・・」

ふいに、頭上を一羽の小鳥がかすめた。

「あ、さっきの・・・」

鳥は優奈の周りを一周すると、滝が流れる崖を飛び、そしてその奥へと姿を消した。

「・・・でもいつかは、またあの退屈な世界へ戻らないといけないんだよね・・・。皆には心配かけたくないけど・・・はあ、あ・・・」

優奈は草原でした時と同じ様に両手を広げて柔らかい土の上に寝転がる。

そしてそのまま目を瞑り、快い風を顔に受けながら、暖かい滝の

子守唄を聞きながら、深い眠りに落ちた

(5) 不思議な少女に出会った。(前書き)

不思議な少女に出会った。

(5) 不思議な少女に出会った。

(ん・・・あ、いけない、寝ちゃってた!!)

優奈が目覚めると、辺りは既に薄暗く、全身に受ける風も冷たかった。

風邪を引いてしまったのか、声を出そうにも出なかった。

(お母さん、心配してるかな)

立ち上がるうとした優奈は、妙な違和感に襲われた。

腕を立てようとしたのに、まるでその感覚がないのだ。それどころか、身体が勝手に浮上し・・・自分の姿が、何だかもやもやしている霧のような物体に見える。

(え、え・・・!?)

優奈の身体は優奈の意思に関係なく、まるで何かに吸い寄せられているかの様に風に乗って森を駆ける。

森を抜けて優奈の目に飛び込んできたのは、信じられない光景であった。あんなにびっしりと生えていた筈の草はその半分も無くなり、そこは荒地と化していたのだ。

「・・・!!」

さらに、上を見上げると遠くの方には黒煙が立ち昇っている。

状況が呑み込めぬまま、それでも優奈の身体は街の方向へと向かう。

しかし、不意に優奈の動きを止めるものがあった。

「おや、ここに居たのだね」

謎の声が優奈の前に立ちはだかり、そして優奈の視界は真っ暗になった。

「大丈夫、私の側に居れば」

その声は、何だか誰かの声にそっくりで、優奈は少しだけ安心感を覚えた。

それから、どのくらいの時間が経ったろう。相変わらず視界は真

つ暗で、箱の中にも入れられているのであろう優奈は、謎の人物に運ばれてと在る場所へと移動している様であった。

扉の開く音、閉まる音。階段を降りる音。そして、揺れが収まる  
と、

「これでいい」

優奈は久々にその声を聞いた。よく考えると、それは自分の声にそっくりだということに優奈は気づく。

不意に視界に光が射し込み、優奈は驚く。箱の中に入った自分を見下ろしているのは、漆黒の、腰まで届いている髪を携えた少女であった。彼女は不気味なピエロのお面で顔を覆い、全身にほどけかけの包帯を巻き付けている。とてつもなく動き難そうな格好である。「ちよっと待ってて」

彼女はそう言うのと、すぐに優奈の目の前に可愛らしくくまのぬいぐるみを置いた。全長1mはあるだろうか。かなり大きめのサイズである。

「このぬいぐるみは、私が丹精込めて作ったものなんだ。その身体じゃ色々と不便だろう？新しい肉体をプレゼントしよう」

ピエロのお面から、そんな言葉が漏れる。

「・・・？」

意味も解らずただそのぬいぐるみを見つめていた優奈の身体は、再び勝手に浮上し始め、そのぬいぐるみ目がけて漂って行く。やがて、辺りが一瞬光ったかと思えば、優奈の精神はぬいぐるみの中に入っていた。

(6) 其の少女は独りぼっちで。(前書き)

其の少女は独りぼっちで。

(6) 其の少女は独りぼっちで。

「成功した・・・」

ピエロのお面の少女は嬉しそうにそう呟き、戸惑う優奈を一瞥すると、優しく話しかけた。

「私の名は、ユウ。ここは、君が先程まで居た世界とは全く別の世界なんだ」

「・・・？」

くまのぬいぐるみである優奈は、可愛らしく首を傾げた。

「別の・・・世界？」

口こそ動いてはないが、ぬいぐるみのどこからかそんな声が漏れる。

「そう。私は、君の精神をこの世界に召喚したんだ。肉体ごとこちらに持って来ることは今の私の力では出来ないからね。・・・君は、あちらの世界でもとても退屈そうにしてたね。私にはそれが見えた。だから君をこちらの世界へ呼んだのだよ。」

ここはとても楽しい場所・・・でも、私は独り。丁度、君に私の遊び相手になってもらおうとしたんだ」

ユウの話はあまり理解出来なかったが、優奈は今、自分が置かれている状況がどれ程不思議なもので刺激的なものかを考えた。感覚からして、夢というにはリアルすぎる。否、もしこれが夢だとしても、とても楽しいもののである。

「どうだい、いつも独りで寂しい思いをしているこの私と・・・一緒に遊んではくれないかい？」

優奈は辺りを見回す。円状の薄暗いこの部屋で、特にこれといって面白そうな物は見当たらない。しかし、どうやらここで遊ぶというわけでもなさそうだ。

「・・・喜んで！！私、北川優奈って言います。宜しく、ユウ」

「良かった。宜しく、優奈」

挨拶を終えると、優奈は其の短い手足を見つめ、ユウに問う。

「それにしても・・・私、どうしてこんな姿に？」

「ああ・・・君が召喚されたのは、精神・・・つまり、魂だけだった事は言ったね。精神だけの身体では、視る、聴く、浮上し、漂う・・・これだけの事しか出来ないんだ。ちゃんとした行動を起こすには、それが出来る肉体が必要となるんだよ。精神と肉体が神経によって結ばれ、そこで始めてちゃんとした身体が成立する。」

君の其の身体の場合、本来の人間のものとは造りが違うね？しかし、私の魔術という力を持ってすれば、外見こそはただのぬいぐるみにしろ、人間ともあまり変わらない身体を造ることが出来たのだよ」

「・・・へえ」

よく解らないユウの説明に、優奈は呆気にとられる。

まあ、彼女が凄い人物である事は理解出来た。

(7) 楽しい時間はあっという間に過ぎてしまった。(前書き)

楽しい時間はあっという間に過ぎてしまった。

(7) 楽しい時間はあっと言つ間に過ぎてしまつて。

「まあ、そんな事はどうだつていい。さあ、早速遊ぼうじゃないか」  
「うん!!」

ユウは優奈をひよいと持ち上げると、壁に設置されてあるレバーを下ろした。すると、ゴゴゴ・・・という低い音と共に、床に大きな穴が開いた。急な階段が中へ続いてあるが、真つ暗でその先は見えない。

ユウは隅に置いてある小さな机の上にある、少し埃を被つたランプに手を翳した。

すると、小さな灯りがランプに出現し、やがてそれは威力を増し、部屋全体を淡く照らし出すものになつたのだ。

「!!どうやったの?」

驚く優奈を得意げに見下ろし、ユウは言った。

「これが私の力・・・魔術つていうんだ」

「へえ、凄いな」

ユウは微笑むと、優奈を抱えている腕とは反対の手でランプを持ち上げ、階段を下つて行つた。

その場所は、とても広いようで、ランプの灯りが届く範囲に向かいの壁は見えなかつた。

「んー、さすがに暗いか・・・」

ユウはランプ下に置くと、すぐ側の壁に付いているスイッチを押した。すると室内は突然、眩しい太陽の光が当てられたかの様な白い空間になつた。

「眩しすぎ・・・」

ユウはスイッチを様々にいじり、明かりを落とした。室内は、遊ぶには丁度良い明るさになる。

優奈は、その部屋の景色を目の当たりにすると、感嘆の声を漏らした。

そこはまるで外の雄大な自然と変わらない景色なのであった。床である筈の場所は草で覆われていて、様々な花が咲き乱れ、蝶がひらひらと舞う。天井である筈の場所は、本物の様な空が広がっている。これもユウの魔術なのだろうか。いや、そうに違いないだろう。「ここでなら、楽しく遊べるなろう?」

ユウはそこで、手を二回パンパンと叩いた。すると、どこからともなく二頭の小さな馬が駆けつけて来たのだ。

「乗ってみて。とても気持ちが良いんだ」

それから二人は、広すぎるその部屋で様々な事をして遊んだ。草原を駆ける馬の乗り心地は最高だし、湖には信じ切れない程大きな魚が泳いでいる。また、様々な種類の動物がそこでは生活していた。「ここって・・・最高だね」

「でしよう?もし良かったら、いつまでもずっと、ここに居てもいいのだよ」

しかし、優奈はユウのその誘いには乗らなかった。

「残念だけど・・・もう家に帰らないと。お母さん、きっと心配してるだろうな」

優奈のその言葉に、ユウは顔を下に向ける。

「そう・・・。また、来てくれる?」

「うん!いつでも呼んでよ」

ユウは突然顔を上げ、嬉しそうに笑った。

「本当?嬉しい!・・・じゃあ、またね」

「うん、またね」

優奈の意識は除々に薄れていき、やがて目の前が真っ暗になった

(1) 母親の愛を素直に受け止めれない・・・(前書き)

母親の愛を素直に受け止めれない・・・

(1) 母親の愛を素直に受け止めれない・・・

「優・・・優奈ッ」

自分の母親、香織の声で目が覚めた。

「ん・・・？」

「ああ、良かった・・・」

突然、香織が優奈を強く抱きしめた。

「痛ッ、痛いよ・・・」

優奈は、毛布に何重にも包くもまれ、自室のベッドに横たわっていた。

「優奈・・・あなた、森に倒れてたの・・・体、とても冷たくて・・・」

・、病院は閉まってたし・・・ああ、どうしようかと思った・・・」

香織は涙を頬に伝わせている。

「お母さん・・・心配かけて、ごめん。私なら大丈夫だから」

どうやら、優奈の精神は別世界で遊んでいたようだが、向こうへ連れて行くことの出来なかった優奈の本来の肉体は、こちらの世界で冷え切ってしまったていらしい。当然ながら、優奈がその事を香織に話す事は無かった。

「ああ優奈・・・お母さんに何かしてほしい事はある？」

「別に、ないよ・・・それよりお母さん、仕事は？」

香織は静かに首を振る。

「そんなのいいから・・・今日は休むわ」

しかしそれを聞いた優奈は、怒りを覚えた。自分が倒れた時にだけ心配して、それで気持ちが悪われるのは自分だけだ、と思ったのだ。しかしそれはあまりにも理不尽なものであった。

「私のためにそんな事しないでッ！！うちお金無いんだから、お母さんが働かないと生活出来ないんだよ？」

「優奈・・・」

香織は優奈を悲しげに見つめると、それ以上は何も言わずに部屋を出て行ってしまった。

「私・・・何てことを・・・」

怒りに任せ、あのような暴言を吐いてしまった優奈の後悔は、母親に届く事は無かった。

時刻は朝の8時。思えば、優奈が森で倒れてから香織は優奈を見つけ出し、部屋まで運んだ上に、ずっと付き添ってくれていたのだ。何故優奈が森で倒れていたかという理由も、優奈の事を思ってたか聞かなかった。

「お母さん・・・」

香織がそれから優奈の部屋に戻って来ることは無かった。恐らく、無理をして仕事に出たのだろう。

「・・・」

どうして私はこうなんだろう。この世界は歪んでいる。私には合わない・・・。そんな事を考えていると、いつしか優奈は再び深い眠りに落ちていた。

(2) 寂しさの末、傷つけてしまう。(前書き)

寂しさの末、傷つけてしまう。

(2) 寂しさの末、傷つけてしまふ。

目を覚ますと、そこには見覚えのあるくまのぬいぐるみがあった。一瞬辺りが光ったと思えば、自分の姿は其のぬいぐるみになっていた。た。

「お帰り、優奈」

背後から、ユウが声をかける。

「あ……れ、私、またこの世界に呼ばれたの？」

「そうだよ。いつでも呼んでいいって言ったよね？それに、今の君は自分の世界にとっても不満を持っているようだから……」

「うん……」

ユウは優しく話しかける。

「嫌な事は忘れて、遊ぼうじゃないか」

しかし、優奈は下を見つめたまま、小さな声で呟いた。

「……今はそんな気分じゃないの。ごめん、元の世界に返してくれないかな？」

「え……どうして？」

ユウは優奈の言葉が理解しきれない様だ。

「私、もうお母さんを傷つけたくない。また今度、遊ぼう？」

『お母さん』という言葉聞き、表情こそ見えないがユウの心が大きく動揺したのを優奈は感じた。

「お母さん……私には、その温もりが分からない。そんなの、どうだっていい……ねえ、遊ぼうよ」

ユウはフラフラと優奈に近づく。

「嫌ッ!!」

咄嗟に、そんな言葉が口をつく。優奈は様子がおかしいユウに恐怖の感情を抱き、彼女から逃げた。扉を開けて外に出ようとしたが、まるで開ける事は出来ない……

「無駄だよ。私には魔術が使えるのだから……あなたを、逃しは

しない……」

いつしかユウの優しい性格は激変し、不気味なピエロのお面が優奈を睨みつけている。

「……!?!」

カーテンを開けて窓から逃げようとした優奈は、外の世界を目の当たりにして絶句した。

何と、建物という建物は全て崩壊し、人の気配は全くない。所々から黒煙が立ち昇り、不穏な空気が街を沈めている。

そう言えば、優奈がこの世界へ来たばかりの頃、森を抜けた時にこのような景色を一瞬目撃していた。楽しい遊びの中でいつしか忘れてしまっていたのだが。

「ど、どうということ!?!」

扉と同様、窓を開けることも出来なかった。

優奈はユウを、危険人物であるかのような眼差しで見つめながらそう問うた。

「そう……この世界は、愚かな人間の仕業で壊れてしまったの……戦争という殺し合いの中で、人は人を傷つけ合って……」

(3) 定められた運命に抗う小鳥の夢は儂くて。(前書き)

定められた運命に抗う小鳥の夢は儂くて。

(3) 定められた運命に抗う小鳥の夢は儂くて。

「戦争・・・!?!」

「私はずっと独りだった・・・。そして、私はこれから幸せになる事は無いんだよ。その事を、私は受け入れなければならぬ。だからせめて、最後に自分の幸せな表情を見たかったんだ。おかげで君を傷つけてしまった・・・すまない」

ユウは突然話を变えたかと思うと、まるで自分に言い聞かせるかのように、静かにそう言った。

「・・・?」

優奈はその時、ユウが言いたい事がまるで解らなかった。

「もうじき私は自らの手で世界を破滅に追い込む事になるのだろうね。少しでも君と居られて良かったよ・・・」

「え・・・」

丁度その時、物凄い轟音と共に地が揺れた。

「!?!」

窓から外を確認すると、優奈の世界のものとは比べ物にならない程大きな、戦車の様な物が外にあった。

「来た・・・」

ユウは包帯の内から、一羽の小鳥をモチーフとしたネックレスを取り出し、それを優奈の首へ掛けた。

「これは、二つの肉体を精神で移動する事の出来るアイテムだ。君がこれに向かつて元の世界へ戻りたいと念じれば、帰る事が出来る。さあ、早くこの世界から脱出して」

しかし優奈は首を縦には動かさなかった。

「うっん、ユウを見捨ててなんていけないよ・・・何があっても、私はユウの事を助けるから・・・」

優奈はその時、これから何が起こるのかは分かっていたが、何か大きな事にユウが巻き込まれてしまうと直感していた。

「ありがとう、優奈は優しいね・・・」  
「・・・」

優奈がユウに何を言おうか迷っていると、ドアが物凄い音を立てて破壊された。ユウの魔術を持ってしても防ぐ事は出来なかったようだ。

「魔女は居るか！？隠れてないで出て来い！！こちらには魔術は一切効かない！！」

低い男の声が二人の耳に届いた。

「さようなら、優奈・・・私には抵抗する力が無いんだ・・・死ぬ事も許されない・・・」

「え、ちょ、どういう事!？」

しかしユウは二度と優奈を振り返る事は無かった。

「私ならここだ。さあ、私の手で世界を終わらせてしまおうではないか」

扉の前で待機する男へと声をかける。

「ふん、抵抗しないとは賢明な判断だな。大人しく我々に付いて来てもらおうか」

優奈の見えない場所でユウは謎の集団に連行され、再び轟音が辺りを支配する。

「・・・」

優奈は一人、どうして良いのか判らずにしばらく自分の首に掛かったネックレスを見つめていた。

「何か・・・凄い事に巻き込まれた様な・・・」

大きな黒い影がまるで優奈から逃げるかの様に、轟音を立てながら、地を揺らしながら遠ざかって行く。

「取り合えず・・・このままじゃどうにもならないし。元の世界に帰るべきか・・・」

優奈はネックレスを握り、目を閉じた。

「どうか・・・私を、元の世界に・・・」

優奈の想いが通じたのか、ネックレスの力により優奈の意識は除

々に薄れてゆく。

(4) 戦争を終わらせるたった一つの方法。(前書き)

戦争を終わらせるたった一つの方法。

#### (4) 戦争を終わらせるたった一つの方法。

首に、ちよつとした違和感を覚えた。

冷たいネックレスの感覚がある。

「ん・・・あ・・・」

一瞬で事態を理解した優奈は、時計を確認する。朝の9時30分であった。優奈は素早く制服に着替えると、自転車に跨って学校へと向かった。

「お早う、優奈」「ずいぶん遅いじゃん」「あはっ、久しぶり〜」

仲間達のそんな声を聞きながら、優奈は自分の教室へ入る事は無く、そのまま職員室へ向かった。優奈が声をかけたのは、地理の男性教師である。かなり老けており、白髪が目立つ。

「どうしたんだい？」

「先生・・・戦争について、なんですけど・・・戦争で破滅しそうな世界を救う方法って、あるんですか？」

優奈の真面目な表情にその教師は少し驚いた様で、

「何故そんな事を・・・？」

訝しげに優奈を見つめる。優奈は普段そんな事を聞く様な真面目な性格ではないからだ。

「え、や、あの・・・そう、レポートを書かないといけなくて・・・」

上手く誤魔化した優奈は、白々しい笑顔を作った。

「そうかい。・・・うん、きっと戦争が一度起こってしまった後では、どうしようもないんじゃないかな。唯一方法があるとしたら、戦争を起こした全員が心を入れ替え、もう戦争はしないと誓うこと、くらいじゃないのか。戦争で新しい国を手に入れたとしても、次は内戦が始まるんだ。人間はその頭脳のおかげで、知らなくていい事を知ってしまい、作らなくていい核兵器などを作ってしまったんだ」

教師は難しそうにそう答えた。

「そうですか・・・では、人はどうしたら心を入れ替える事が出来るのでしょうか？」

「それは簡単だよ。悪い事をしている人に、その事をした事で起きる、『嫌』な思い出を脳内に刻みこませればいいのさ。例えば、万引きをして警察に捕まった。もうその人が二度万引きをする事は無いだろうね。まあ、たまにしてしまう人もいるが・・・」

優奈も一緒に難しそうな表情をし、

「ありがとうございます」

そう頭を下げた。

「まあ、まだこの世界はそこまで危険な状態に陥ってはいない。今の内にならどうにでもなるんじゃないかな、戦争なんて」

いまいち良い情報を手に入れる事は出来なかったが、結局戦争を終わらせる方法なんて、彼の言う通り皆の心が変わらないといけないのだ。

あの時ユウを連行して行った連中はきつと、ユウの強大な魔術を利用して敵対国を脅かせるつもりなのだろう。しかし、彼女は言っていた。『もうじき私は自らの手で世界を破滅に追い込んでしまうのだろうね』と。あれは、一体どのような意味だったのか・・・

「私が行って、奴らの心を変えなければならぬんだ・・・。あの世界を、救わないと」

いつしか優奈は、強い使命感を胸に抱いていた。授業を一つも受けないままに、再び自転車を飛ばして家へ戻る。

母親にメッセージを書いた。『私は今から旅に出ます。しばらく目を覚まさないと思うけど、心配はしないで。色々迷惑をかけてごめんなさい。私を信じて・・・』

全ての準備が整うと、優奈は布団に潜ってネックレスを握り締めた。

「私を・・・ユウの世界へ・・・」

目を瞑ると、自然に精神は世界を移動した。

(1) 彼女を想う心が私を突き動かす。(前書き)

彼女を想う心が私を突き動かす。

(1) 彼女を想う心が私を突き動かす。

ぬいぐるみの中に精神が込められると、優奈の行動は早かった。ユウが居た、唯一大きな傷が残っていないその家を後にする。

大きな戦車の大きなタイヤの跡を追う。街は、破壊されてボロボロに崩れていることを除けば、優奈の住む世界とはほとんど変わらない景色であった。

ぬいぐるみの身体は、走っても走っても疲れる事は無かった。気づくと辺りは暗くなり、月の光が淡く優奈を照らしていた。

自分の擦り切れた足を見つめ、そして目の前に集中する。そこには、とてつもなく大きな建物が聳<sup>そび</sup>えていた。

『B地域特殊部隊基地本部』 大きな看板が、その存在を示していた。

「さて、ここからどうしようか・・・」

何の計画も立てずにここまで来てしまった優奈は、そこで始めて行き詰った。基地の正門には例のごとく門番が数人、重そうな武器を手にして立っていたのだ。いくら自分が可愛らしいくまのぬいぐるみであると言え、怪しまれてしまったら全て水の泡だ。

すると何とタイミングの良い事に、優奈の背後から一台の戦車が基地へ帰還するために走って来たのだ。ユウを連行したものよりは一回り程小さいようだが、それでもかなり大きい。

優奈は少しも怪しまれる事なく戦車の下に潜り込むと、布と綿で出来た手を器用に使って下にへばり付いた。

戦車はそのまま、何事も無かったかの様に正門を抜けると、巨大な倉庫の様な場所の中へ入り、停車した。

しばらく、ガチャガチャという装備の音や砂利道を何人もの隊員が進む音が続き、そして辺りは静まり返った。

「よっと・・・」

地面に着地した優奈は、監視カメラに見つからないよう、体を小

さくして倉庫を後にした。

「ん・・・?!」

しかし、ある男の声が優奈を震わす。そのまま優奈は倒れ込む。雑巾を片手に、その男は戦車の拭き掃除をしていたらしい。

「何だこのぬいぐるみは・・・ああ、お嬢様のぬいぐるみか」

男は優奈を拾い上げると、砂や汚れを払い、持っていた雑巾はポケットの中にした。

「それにしても、一体どうしてこんなところにあるんだ？随分ボロボロになっているし・・・」

しかし男はそれ以上追及する事はなく（ただのぬいぐるみに話しかけても意味はないが）、優奈は一安心する。それにしても、これから何処へ連れて行かれるのだろうか・・・

(2) 私はただ無力だった。(前書き)

私はただ無力だった。

(2) 私はただ無力だった。

「ねえ、この辺誰も居なくなっちゃったよ。まだ戦争を続ける気？」  
まだ10代前半であるう幼き少女は、金の髪を肩まで巻いて、頭には特大の真つ赤なりボンを付けている。彼女が話しかけているのは、立派な椅子に腰掛けた白髪混じりの男だ。

「ああ、その通りだ。この辺の土地はお前にあげようか」

男の言葉に、その少女は目を輝かせる。

「本当？瑠華、嬉しいッ。お父さんなら世界を手に入れられる・・・  
そうでしょ？」

「そうだよ。お父さんに任せなさい。瑠華の遊び場くらい、いくらでも増やす事が出来るんだ」

男は満足げに、瑠華という、その少女の頭を撫でる。

「うん。・・・でも、瑠華、本当は・・・」

瑠華は俯き加減にそう言いかけ、

「ううん、やっぱり何でもない」

明るい笑顔を繕ってその場を後にした。

「旦那様・・・」

先程までの一部始終を静かに見つめていた、ある男がふと声をかけた。

「む、何だね？」

「こちらのぬいぐるみが落ちてあったのですが・・・もしや、瑠華お嬢様の物では？」

そう言い、持っていたたくまのぬいぐるみを差し出した。

「うーむ、見た事はないな。だが、瑠華の物に間違いは無いだらう。戦車整備員よ、瑠華の部屋まで届けてくれ」

「はっ、了解しました」

大きなくまのぬいぐるみを抱えたその戦車整備員の男は、一度瑠華の父親であるその人物に敬礼をすると、速やかに部屋を後にした。

(うーん、困ったな。本当にここにユウは居るのかな?)

優奈は男の腕の中、一人考えを巡らしていた。

「ええと、お嬢様の部屋は・・・」

館内が広すぎるのか、この男の物覚えが悪いのか、不意に男は館内案内板の前で立ち止まった。優奈も何気なく目を向けたその案内板には、地下にそこだけ場所名が記されてない場所を見つけた。

(牢屋に違いないッ!!)

優奈はそう直感し、そこにユウが居る可能性を信じた。

(ユウ、もうすぐ助けに行くから・・・)

「ここを曲がって直ぐか」

男は再び歩み始めた。

(3) 魔王の娘の初めての友達は。(前書き)

魔王の娘の初めての友達は。

(3) 魔王の娘の初めての友達は。

扉を二回、ノックする音。

「だあれ？」

静かに読書をしていた瑠華は、興味無さそうに視線を上げる。

「戦車整備員の者です」

予想外の客に、瑠華は眉をひそ顰める。

「・・・何の用？」

言いながら、扉を開ける。

「瑠華お嬢様のぬいぐるみが落ちていたのを発見しまして。どうぞ戦車整備員の男はぬいぐるみを瑠華に渡すと、「失礼します」と一言言い、その場を立ち去った。

「何これ、こんなの私知らない・・・」

瑠華は訝しげに、自分の腕に抱かれたくまのぬいぐるみを見つめる。

「でも、気に入ったわ。私のお友達にしたげる」

頬を自分の頭に擦り付けられた優奈は、ぽんぽんと進んでゆく話の展開に戸惑っていた。

(こりゃしばらく自由に動けなさそうだな・・・)

案の定、瑠華が優奈を手放すのは、これからちよっと先の事となる。

「私、ずっとお友達が欲しかったのよ」

瑠華は優奈にそんな言葉をかけながら、読んでいた本に可愛らしい葉を挟むと、立ち上がって部屋を出た。もちろん優奈も一緒に、  
だ。

「瑠華お嬢様、どちらへ？」

すかさずその声をかけたのは、若々しい執事の男であった。見た目は10代後半程だろうか。白く、端正な整った顔立ちは、それだけで周りの女が寄り付きそうである。瑠華と並ぶと、まるで兄弟の

様に見えた。

「今日は気分が良いの。ちょっと出かけたんだけど。壮一、一緒に来てくれる？」

壮一と呼ばれたその執事は、何とこの若さでありながら、優奈を担当する一人前の執事である。優奈からもよく頼られている存在だ。

「ええ、もちろん。外は荒れていますから、少しだけですよ」

「いくら荒れてても構わないわ。もうすぐこの地域は私のモノになるんですもの」

壮一はにこりと微笑むと、

「それは楽しみです。さあ、参りましょう」

丁寧に瑠華の手を引いて歩き出した。

「それにしても、そちらのぬいぐるみはどうされたのですか？」

壮一は、今まで見た事のないそのぬいぐるみに興味を示す。

「ああ、お父様がプレゼントしてくれたの。可愛いでしょう？」

瑠華は何故かそんな嘘を吐き、まるでそれを隠すかの様に瑠華を強く抱きしめた。

「・・・そうですか」

一瞬、優奈は壮一の視線に身を震わせた。壮一が、まるで全てを見通しているかのような冷たい目で優奈を睨み付けたのだ。

「さあ、これを着用して下さい」

しかし、次の瞬間には壮一の視線は目の前のごつい宇宙服の様な物に向けられていた。

(4) もう一つの物語が幕開けて。(前書き)

もう一つの物語が幕開けて。

(4) もう一つの物語が幕開けて。

「外は攻撃後なので、悪い物質が漂っている可能性があります。それに、もし生存している住人が居てもしたら銃で撃たれてしまうかもしれませんから。多少動き難いかもかもしれませんが、これを着用しないと外へ出すわけにはなりません」

言いながら壮一は、自分にぴったりのサイズのものを手に取り、手慣れた手つきでそれを着用する。

「はい」

瑠華も、少し小さめのそれを着用した。

「ご準備はよろしいですか？では、外へ」

「うん」

二人共、着用している特殊スーツにより声がかくぐもっている。

「どちらへ行きましょうか？」

「んゝ・・・、その辺を見て回りたいの。これからここをどう開拓するかとかを考えながらね」

瑠華は、ユウが住んでいた方向へと進む。流石にユウの家は遠いので、そこまで行く気は無いようだ。

「燐、こっち。まだいっぱいあるよ」

暗いコンビニの店内に、二人の少女が居た。店内に他の人間はおらず、二人はどうかやられてる窓の隙間から侵入したようだ。また、棚にはほぼ商品は並んでおらず、今、燐という少女に声をかけたもう一人の少女の前には、僅かながらもいくつかお弁当が並んでいた。

「楓お姉ちゃん、流石！！これなら二日は不自由しないね」

二人は残っているお弁当を全て腕に抱えると、当然の様に無人のレジへ向かう事無く、入って来た時と同様に窓の隙間からコンビニを後にした。

「お母さん、これ食べて元気つけて」

例のコンビから少し離れた場所にある、崩壊した一軒の家へ潜り込んだ楓と燐、二人の姉妹は家の中で横になっていた彼女らの母親と合流する。

その母親はとても疲れ切った表情をしており、荒い息を吐いている。

「ありがとう・・・」

そうは言ったが、娘たちが差し出すお弁当を手取る事は無かった。

「お父さん、無地かな・・・」

自分たちだけでもとお弁当を食べながら、燐がふとそんな言葉を漏らした。

「大丈夫だよ・・・きと今頃、バケツいっぱい綺麗な水を汲んで、鼻歌交じりに帰ってるんだから」

楓は自分にも言い聞かせるようにそう答えた。

季節は秋。崩れた壁の隙間から入って来る風が冷たい。

「痛ッ」

お弁当を食べ終えて、立ち上がった燐は落ちている屋根に頭をぶつけた。

「大丈夫？」

「うう・・・」

頭を抑え、しゃがみ込む燐。その耳に、小さな声が届いた。

”あー、今何か物音がしたような・・・”

燐より少し年上で、楓よりは少し年下の様な、可愛らしい少女の声だ。

”お嬢様、気を付けて。私が見て来ますので”

別の声。今度は、もっと年上の男の声の様だ。

「燐、お母さんと奥に隠れて」

「え、お姉ちゃんは？」

楓が緊張感のある面持ちで静かに言う。

「私の事は気にしないで・・・早くッ！」

「う、うん・・・」

隣は楓の迫力に押され、母親を半分引きずるようにして奥の部屋へ連れ込む。

すぐに、先程の声の主であろう男が階段を上ってやって来た。

「・・・」

「・・・」

目が合ってしまった二人は、しばらく沈黙する。

「まだここに生き残りが居たのか・・・残念だが、この地域の住人はもう必要ないんだ。命は無い」

まだ若いその男が、取り出した銃を楓に向けると、彼女は覚悟を決めたかのように目を閉じた。

(5) 少女は正しい言い訳を語る。(前書き)

少女は正しい言い訳を語る。

(5) 少女は正しい言い訳を語る。

「嫌ッ！」

「待ちなさい！！」

二人の少女の声が重なった。

奥の部屋から燐が飛び出し、一階からは幼い少女、瑠華が駆け上って来た。

楓はどうして出てきたのと言わんばかりに燐を強く睨み付け、楓に銃口を向けた壮一は、そのままの体制で横目で瑠華を見つめる。

「その子たちを殺さないで……」

瑠華が、かすれた声で壮一に懇願する。

「何故です？彼女たちは私たちの敵なんですよ」

壮一はいつもより厳しめの口調でそう言った。

「元々は……一緒に戦う立場の子たちよ。でも、世界一になりた  
いお父様は同じ国の者でも、要らない人間は容赦なく潰していった。  
……天皇は国を逃げたし、今じゃお父様がこの国のトップと言って  
も過言じゃないでしょうね。でも、私思うの。トップは下の人の助  
けがあつてこそ成り立つんだって。……だから、その……なる  
べく下の人達も大切にしようよ。どうせここ、もうすぐ私の地域に  
なるんだし……」

瑠華は一つ一つ慎重に言葉を選び、言い訳にもなっていない言い  
訳で必死に壮一に訴えかけた。

壮一はしばらく不思議そうな表情で瑠華を見つめていたが、やが  
て何かを諦めたかのように首を振り、

「お嬢様がそこまで言われるのなら、仕方ないですね。正し、あな  
たのお父様に知られてはなりませんよ」

悪戯っぽく笑って銃を下ろした。

「ありがとう……」

瑠華の、優奈を抱き締める腕に力が入る。

死を免れた楓と燐は共に安堵し、その場にへたり込んだ。

「お姉ちゃん・・・良かった・・・」

「ええ・・・」

胸を撫で下ろし、生きていることを実感する。

「・・・その二人、名は何と言う？」

瑠華の口調は先程とは打って変わり、目の前の少女二人に対しそう尋ねた。

「水谷・・・楓。こっちは燐で、私の妹です」

「そう。私の事は分かるわね？他にあなたたちの仲間は何人居るのかしら？」

楓は、まだ帰って来ていない父親の身を案じる。

「奥に、母親が居ます。・・・父は、外へ帰ったきり・・・」

それを聞いて、瑠華は何故が一瞬暗い表情になった。父親に会えていない楓と燐の事を哀れむというよりも、自分の中の傷と戦っている様な、そんな感じであった。

「あなたたちの父親は後程捜しておくように言っておくわ。取り合えず、母親も連れてあなたたち三人を基地へ通してあげる。・・・」

私のお父様が知ってしまうといけないから、第二基地になるけど、それから瑠華はさほど離れた場所でない第二基地へ三人を案内すると、どこかいつもより楽しげな表情をして『B地域特殊部隊基地本部』へ戻った。

「今日は色々あって疲れちゃったなあ。早めに寝ようかしら」

「・・・では私はこれで。あとはメイド達に任せておきましょう」

壮一は瑠華を部屋まで送り届けると、姿を消した。

すぐに近くに居たメイドがやって来て、瑠華を風呂場まで連れて行く。

「こちらのぬいぐるみはお預かりしますね。今日の入浴剤は何に致しましょうか？」

事件は、これから二日後に起きる・・・

(6) 本当の友達が出来たその日。(前書き)

本当の友達が出来たその日。

(6) 本当の友達が出来たその日。

その日、瑠華の父親は別の基地へ向かったため、この基地にはト  
ップが居なかった。

それをいい事に、瑠華は水谷家を誘って食事を開いた。もちろ  
ん父親には内緒、周りに居る使用人達にも口止めをしておいた。  
しかし、楽しい食事会の筈なのに水谷家の表情はつれない。

「どうしたの？」

瑠華が怪訝そうにそう尋ねた。

優奈はその光景を、一人のメイドの腕に抱かれながら見つめてい  
る。

「あの・・・お父さんは、まだ見つからないのですか？」

不意に、楓が俯いたままそう尋ね返した。瑠華は水谷家の気持ち  
を察し、つられて俯く。

「残念だけど・・・まだ見つかってはいないわ。ごめんなさいね」  
しばらくの沈黙。その後、瑠華が静かに語りだした。

「私には・・・母親がいないの。お父さんしかない・・・その  
お父様も、忙しすぎて私に構ってる余裕なんてなくて・・・私に  
は、あなたたちの気持ちが良い分かるわ」

「・・・だから、私たちを救ったの？」

楓にしては珍しく、強めの口調で瑠華に迫った。

しかし瑠華はすぐに首を振った。

「いいえ・・・私、ずっと友達って存在が欲しかっただけなのよ。  
何でも気兼ねなく話せて、困った時や悩んでいる時には良い相談相  
手になってくれて・・・。私は昔から独りだったから・・・」

言いながら、彼女の視線は優奈に向けられる。

きつと彼女は、友達代わりとして優奈を嘘を吐いてでも手に入れ  
たかったのだろう。でも今、彼女は本当の友達となりし者たちを見  
つけたのだ。

「お願い、私と友達になつて・・・お願い・・・」

本来いつも頭を下げられてばかりの立場の者が、まだあまり知らない人たちに何度も頭を下げたのだ。周りが一瞬どよめく。

「ええ、もちろん」「いいよ」

楓と燐は優しげに瑠華に手を差し伸べる。

「ありがとう・・・」

瑠華は二人の手を順に握り、涙を一筋流した。

「改めて、自己紹介をしましょう。」

神山瑠華、11歳よ。宜しく」

「水谷楓、17歳。こちらこそ」

「燐、9歳!!」

すると、周りから拍手の音が広がり始めた。使用人達は働く事も忘れ、この時を一緒に喜んだ。

「ふふ、良かったわね」

楓と燐の母親は、微笑ましげな目でこの三人を見つめていた。

喜ばしい事というのは続くもので、その時壮一が慌てて駆けつけて来て、こう言った。

「水谷様の父親が・・・地下牢に収容されていた事が判明しました！！まだ出す事は出来ませんが、面会なら出来ますよ」

(7) 家族の再会、少女の嫉妬 (前書き)

家族の再会、少女の嫉妬。

(7) 家族の再会、少女の嫉妬

その瞬間、水谷家三人は目を丸くし、喜びのあまり抱き締め合った。

この光景を見ながら、何故か瑠華の笑顔は白々しく、どこか寂しげなものであった。

「良かったわね・・・」

台詞も棒読み、声すらあまり出ていなかった。

食事は一度中断し、水谷家と瑠華、瑠華に抱かれた優奈と、そして壮一との六人は地下にある収容所へと向かった。

階段を降りると、通路に幾つもの収容室へ入る扉が設置されている。

(ユウに会える!!)

この時優奈の緊張は最高潮であった。しかし、一体どうやってユウを助け出そうか、考えてはいなかった。

「こちらの収容室になります」

壮一が案内したその部屋に入る。強固そうなガラスの壁の向こうに、楓と燐の父親が居た。彼は愛しい家族三人の姿を認めると、急いで駆け寄ってきた。会話をするための、幾つも開いた小さな穴の奥から、彼の言葉が聞こえる。

「三人共、無事だったか・・・俺はこの通り、捕まってしまったんだ」

「お父さん・・・！私たち、彼女に助けられたの」

楓は隣に居る瑠華を紹介する。

「どうも。この国のトップ、神山 司つかねの娘、瑠華よ。私はお父様のやり方に反対してるから、いつかきつとここから出してあげる。その時まで待っていて頂戴」

さらりと瑠華はそんな事を言った。

「ああ、感謝するよ。殺されるか・・・思ったよ」

「死んでれば良かったのに」

その時ぼそりと呟いた瑠華のその言葉は、彼女の腕の中の優奈にしか聞こえなかった。

(・・・!!)

優奈は彼と瑠華の将来を心配する。

「さあ、ここは家族水入らずの場ですから・・・そつとしておいておきましょう」

もしかしたら、先程の発言は壮一にも聞こえていたのかもしれない。壮一は瑠華を促して部屋を出る。

「ふん、何よッ」

瑠華はお嬢様である立場にはそぐわない強い発言と共に優奈を床に投げつけ、走って場を後にした。

「お嬢様、お待ち下さいッ」

壮一も後を追おうとしたが、一度立ち止まって優奈を振り返った。

「お前が出来る事は、もう何も無い。せいぜい無駄に足掻けよ、小娘」

そんな言葉を吐き捨て、何事も無かったかのように瑠華を再び追い、姿を消した。

「何よあいつ・・・私、絶対この世界を救うんだから」

(8) 世界の破滅が迫ってる。(前書き)

世界の破滅が迫ってる。

(8) 世界の破滅が迫ってる。

「えーと、ユウはどこに居るのかな・・・」  
優奈は通路を必死に見回す。

そして、一際目立つ一つの入り口を発見した。上に、金色のプレートが設置されてある。見るとそこには、『特殊能力者収容室』という文字が彫られており、優奈は一目でこの中にユウが居ると直感した。

「ユウ?!」

入室するなり、大きな声でそう叫んだ。

そこには、真っ白な少女が居た。

「え・・・!?!」

近づいて確認すると、それは露出している肌の部分が手先ぐらいしかない程までに包帯で身体中をぐるぐる巻きにされたユウの姿であった。

「ユウ!?!」

優奈のその声を聞いたユウは、動き難そうな足を動かし、ゆっくりと優奈へ近づいた。

「優奈・・・久しぶりだね。まさかここまで来てくれるとは思わなかったよ」

ピエロのお面から聞こえるその声は弱々しいものであったが、しかし優奈と再会出来て嬉しそうであった。

「どうして・・・そんな姿にツ？」

「・・・それはね、私の魔術を完全に封印するためなのだよ。今の私には・・・どんな小さな力だって使う事が出来ない・・・」

「そんな!! どうして!?!」

優奈は辛そうに声を上げる。

「もちろん、私がここから逃げないためだよ。この包帯は特殊なものだね。どんな手を使ったって私に解く事は出来ないんだ・・・」

「・・・私が、その包帯を解いておけば良かったのに・・・そしてら、あいつらからも連行される事は無かったでしょうに・・・」  
しかしユウは、首を悲しげに振った。

「いいや、私の力を完全に目覚めさせるわけにもいかないんだ。そうしたら、私のこの莫大な力は暴走し始め、私にだってコントロールが効かなくなってしまう・・・そう、それこそ世界を破滅しかない。しかし、話の分からないこの基地の連中は、私を使って自分の国を地球上のトップにしようと目論んでいるのだよ・・・」  
「・・・その時、ユウの包帯を全て解くんだね」

優奈は何か良い方法はないかと必死に考えてはみたが、結局何も思いつかなかった。

「ユウ、すまないね・・・。君をこんな事に巻き込んでしまった。・・・君はもうこの世界から、この運命から逃れる事は出来ないのだよ・・・」

不意に、ユウが辛そうに口を開いた。

「え・・・?」

「君の持っているそのネックレス、君の世界とこの世界を移動出来る力を持っているね。しかしそれは、私の力が無いと使う事は出来ないのだよ・・・」

つまりそれは、優奈がもう元の世界へ帰る事は出来ないということだ。

しかしそれを聞いた優奈の反応はユウにとって意外なものであった。

「ううん、大丈夫だよそんなの。だってこれは、私が選んだ運命なんだから」

そう言って、にこりと微笑んだ。

「優奈・・・私は、君と出会えて本当に良かった・・・」

「私もよ、ユウ。でも私、まだ諦めてないから。絶対、ユウを、この世界を救うから!!」

その言葉に対するユウの返答は無かった。代わりにユウはゆっくり

りと部屋の隅へ移動すると、その場にしゃがみ込み、少しするとまた優奈の前に戻って来た。その手先には、何か黒いものが止まっていた。それは、神秘的なオーラを放つ、黒い蝶。

(9) 最後の贈り物、それは・・・(前書き)

最後の贈り物、それは・・・

(9) 最後の贈り物、それは・・・

「優奈・・・君に、この新しい肉体を授けよう。・・・私が、誰かのために使った・・・最後の魔術だ。私がこの部屋に入れられた時、力を完全に封印されてしまう前に、この蝶が舞い込んで来たんだ。私はその肉体を少し改良して、優奈の精神が入るのに都合良いようにしたんだよ。・・・おかしいね、私はずっと優奈を待っていたよ。うだ」

「ユウ・・・ありがとう。確かにこの身体じゃ、基地を徘徊するのは向いてないしね」

ユウは、蝶が止まったその手を優奈に差し出し、言った。

「そのネックレスには・・・まだ僅かながらも、私の魔術が残っている。その最後の力を使って、優奈の精神をこの肉体に移し、ガラスをすり抜けて戻る事くらいは出来るだろう。ちよっとじっとしていてくれ」

「ん・・・」

優奈は言われた通りに大人しく、そのネックレスを見つめていた。辺りが一瞬光り、精神だけの身体となった優奈は浮上しながら音をとるための穴をくぐり抜け、ユウの手先へと向かう。再び辺りが瞬き、気づいた時には優奈はユウの手先に止まっていた。

「さあ、急いでガラスをすり抜けるんだッ」

ユウの切羽詰ったその声に押され、慣れない羽を不器用に羽ばたかせながら、優奈はガラス目がけて突っ込んだ。一瞬、水の中に入った時の様に視界が霞み、無音の空間に放り出される。もしこの瞬間にユウの魔術が切れでもしたら、優奈はこの空間に押しつぶされて死んでしまうのだろう。そんな恐怖が優奈の頭の中をかすめた時には、優奈は空中へ還っていた。

「優奈・・・頑張って・・・」

ユウはそこで意識を失ったのか、バサリと大きな音を立てて倒れ

た。

「ユウ・・・絶対に、助ける。約束だよ」

優奈が飛び立った後の部屋には、倒れ込んだユウと、少し大きめのくまのぬいぐるみが静かに寝転がっているだけとなった。

(9) 最後の贈り物、それは・・・(後書き)

いよいよクライマックスです。

優奈とユウの関係が今明かされる・・・!! (笑)

(1) 謎の部屋には真実が。(前書き)

謎の部屋には真実が。

(1) 謎の部屋には真実が。

優奈は地下室を出て、近くの通路先にあつた基地内案内板を見つめる。二階に、『魔術研究室』なるものを見つけた。

「きつとここに、何かのヒントがあるはず・・・」

場所を脳内に刻み込み、なるべく天井付近を飛んで人に見つからないよう心がける。最初は危うかった羽の使い方も、今では自由に使いこなす事が出来ている。

蝶の身体は動きやすい。何より、その色が黒いので暗闇に紛れてしまえば誰の目にも止まる事は無かつたし、狭い空間だつてスイスイ通る事が出来た。しかし、その小さな肉体故、どうしようもない事も多々あつた。例えば、今自分が置かれている状況がそうである。魔術研究室の前には到着したものの、その重い扉の向こうへ行く事は不可能であつた。本来の人間の肉体でなら、ただドアノブを回して扉を引くだけでいいのだ。子供にんだつて出来るそんな行動を起こせない自分に苛ついた。

扉の近くに身を潜めること約一時間。待ちくたびれた優奈の前に、ようやくその人物は現れた。黒いローブを身に纏い、フードを深く被っているためその顔は伺えない。女性が男性かの区別もつかぬその人物は、鍵の掛かつていないその扉を簡単に開けた。優奈はタイミングを見計らい、扉が閉まる寸前に中へ飛び込んだ。

その部屋は、何とも不気味なものであつた。壁に所狭しと並んだ棚には、水晶だの髑髏だのが整理されて置いてある。床には大きな丸い模様の周りによく分からない文字が刻まれたものがある。よく漫画やアニメなんかで出てくる、魔方陣というものだろうか。

優奈はある机に向かつて飛んで行つた。何かの記録を記したファイルがたくさん重ねられている。そして、”それ”は机に広げられていた。

(『魔術による世界侵略作戦<極秘>』ですつて。・・・極秘ファ

イルをこんなにも無用心に放置しておくなんて、敵対国もナメられたもんね・・・)

黒フードの人物は、別の机に向かって何か書き物をしている。今ならゆっくと、その内容を拝見する事が出来そうだ。

その内容は、以下の通りであった。

(2) 協力者、現る。(前書き)

協力者、現る。

## (2) 協力者、現る。

『魔術による世界侵略作戦<極秘>』

使用する魔女：B73

特徴：包帯 ピエロの面

威力：推測・世界侵略を数分間で出来る程度。

また、特殊な包帯で全身を巻くと威力はほぼ皆無。

隔離場所：特殊能力者収容室（地下牢）

使い方：包帯をコンピューター制御で安全に解き、コンピューター制御で意思をコントロールする。設定した地域を選択し、決定ボタン（赤）を押す。

作戦決行日：3月1日午前九時

優奈はそれを見て驚愕した。

（嘘・・・明日じゃない・・・）

そう、この日は2月28日、つまり2月最後の日であった。

（私にしか・・・この世界を救えないのかな）

優奈は書き物を終え、いくつかのファイルを手にして立ち上がった。黒フードの肩に止まる。

部屋を抜け出した優奈は、取り合えず瑠華の元へ向かう事にした。今、この基地内でのトップは彼女だからである。

しかし、瑠華の部屋へ行ったところで、結局はどうして良いのかわからずに羽を止めてしまうのであった。

「壮一、お父様が新しい本を送って来てくれてるハズよ。取りに行ってくれないかしら」

「はい、只今」

瑠華の部屋から出てきた壮一は、鋭く優奈の姿を捉えた。

「どうやら真実を知ってしまった様だな。何故お前はこの運命に足掻く？もうこの世界は救いようが無いというのに・・・死んでしま

「うのが怖いのか？」

優奈は、何を隠してもこの人には通用しない、そう感じた。

「私はユウと約束したのよ、この世界を救うって」

すると壮一はさもどうでもよさそうに、言葉を返した。

「約束か、所詮そんなの守れる奴なんてあんまりいないんだ」

それから優奈を真面目な表情で見つめると、

「・・・だがお前には何かを感じる・・・もしかしたら、お前は約束を本当に守る、ごく一部の者なのかもしれない」

優奈の方へ手を差し伸ばした。

指先に止まった優奈と共に、在る部屋へ向かった。

(3) 私はこの世界の救世主。(前書き)

私はこの世界の救世主。

(3) 私はこの世界の救世主。

その部屋はどうやら壮一自信のものであるらしく、簡易なベッドにクローゼット、そして少し大きめの机の上には大きな機械が乗っている。画面付属しているそれは一見すると大型のパソコンの様だが、それにしても大きな物であった。

「これは俺愛用のコンピューターだ。この中に基地の全ての情報が入っている。もちろん其の事は俺しか知らないが」

壮一の淡々と話すその口調は、瑠華や他の人に接する時の口調とは随分違っていた。

「・・・どうしてそんなモノを？」

壮一は薄く微笑むと、

「一流執事の特権ってやつだ」

そう言い、キーボードに素早い手つきで何かを入力した。少しするとコンピューターは独特な音を発しながら起動する。

「さて。この一流執事に、何か手伝える事はあるか？お前の発言次第でこの世界の運命が変わるかもしれない。この基地内の事なら、俺に出来ない事はない」

優奈は突然の話の展開に戸惑う。もしかしたらこの人は、この国のトップよりも凄いのではないだろうか。

「え・・・と。あの、どうして私を手伝う事にしたの？」

「ふん、俺はここに来た時からもうこの世界は終わるものだと確信していた。それはお前が現れてからも変わらなかつたが・・・いつしか、お前を見ていると世界の運命を変える事が出来る様な気がしたんだ」

優奈は満足そうに、

「つまり私はこの世界の救世主、ね」  
そう言った。

「俺の力が無ければ何も出来なくて口うるさい、ただの虫じゃねえ」

か」

しかし壮一は冷たく言い返した。

「まあ、執事とは思えない言い方。その口調で瑠華ちゃんなんかにも話しかけてみなよ」

「は、勘弁」

優奈はその様な会話の中で、口こそ悪いが壮一を信頼するようになっていた。

(4) 世界を変える一台のコンピューターは。(前書き)

世界を変える一台のコンピューターは。

(4) 世界を変える一台のコンピューターは。

「いいわ。じゃあまず、ユウの意思をコントロールするコンピューターがあるそうね。それを使えないようにしてくれる？」

「ああ任せろ。ただ、そいつが使い物にならなくなったら、B73の力は暴走し始めるぞ。何か考えでもあるんだろっな？」

「大丈夫、包帯もコンピューターで解くみたいだから  
優奈はニコツと笑う。

「少し時間がかかる・・・」

壮一は目にも止まらぬ速さでキーボードに指を叩きつける。画面上に、優奈には全く理解する事の出来ない文字の羅列が広がってゆく。

しばらくし、手を止めた壮一の手が若干震えている事に優奈は気付いた。画面には『error』の文字。

壮一はちツと舌打ちをし、呟いた。

「思ったよりもセキユリティが重い。これを解除するには・・・少なくとも12時間はかかる、か」

「そんなッ！！だって作戦の決行は、明日の午前九時だよ？」

時計を確認する。時刻は夜の十一時過ぎ。もう作戦の決行時間には間に合わない。

しかし壮一は冷静な態度であった。

「お前が見たその極秘の書類は、これだな？」

いつの間にか画面には、優奈が魔術研究室で見た、あの極秘の書類がそっくりそのまま展開していた。

「うん、確かにこれよ」

壮一は優奈の返答を聞く前に、見事にその内容の一部を変更していた。

『魔術による世界侵略作戦<極秘>』

使用する魔女：B73

特徴：包帯 ピエロの面

威力：推測・世界侵略を数分間で出来る程度。

また、特殊な包帯で全身を巻くと威力はほぼ皆無。

隔離場所：特殊能力者収容室（地下牢）

使い方：包帯をコンピュータ制御で安全に解き、コンピュータ制御で意思をコントロールする。設定した地域を選択し、決定ボタン（赤）を押す。

作戦決行日：3月1日午後九時

作戦決行日の、『午前九時』であつたところが、『午後』九時』に変更されている。

「今からこれを紙にコピーするから、お前はそれと本物を入れ替えるんだ。俺は一眠りしてセキュリティ解除の作業に取り掛かる。長い戦いになるからな、寝ないと意識が持たない」

間も無くすると、壮一の手には一枚の紙が握られていた。偽造された極秘の書類。

「そんな、この身体じゃ持てっこないよ」

「いいや、そんな事は無い。持て」

壮一は無理やり、優奈の細い手に紙を握らせた。重みで落下すると思つたのだが、何故かその重みはあまり感じなかった。

「俺も実は、ちょっとした魔術が使えるんだ。・・・本当にちょっとしたものしか使えないが」

壮一は眠そうにそう呟くと、ふらふらとベッドの方へ向かい、そのまま倒れ込んでしまった。

(5) 作戦失敗、そして・・・。(前書き)

作戦失敗、そして・・・。

(5) 作戦失敗、そして……

「……さて、どうやってこれを運ぼうか……」  
紙の重みは感じないが、このままでは動き難い。器用に足を使つて、数度折り畳んだ。ここからは決して人に見つかるわけにはいかない。紙を持つている蝶なんて、それだけで皆の注目の的となってしまうだろう。

部屋の扉は優奈がギリギリ通り抜けれる程度に開いており、そこを抜けて天井付近へ移動する。

「ここからは誰も頼れないんだ……」

自分にそう言い聞かせ、魔術研究室のある二階へ向かった。

すると、何とタイミングの良い事に黒フードの人物が部屋へ向かっていた。背丈などから判断し、先程の人物ではないようだ。優奈は急いでその肩に止まる。先程ここへ来た時よりも、容易に部屋へ入る事が出来、優奈は安堵する。

(後は、この二枚の書類を入れ替えるだけ……)

例の極秘ファイルが広げてある机の上に舞い降りると、優奈は自分の持つている偽者の書類を丁寧に広げようとした。が、その矢先ガチャツという扉の開く音と共に、もう一人の黒フードの人物が部屋へ入って来た。優奈は驚き、思わずその反動で偽造した書類を地面に落としてしまった。下手に動いて見つかってしまう事を恐れ、優奈は机の隅に身を隠す。しかし運の悪い事に、その黒フードは優奈が隠れる机の前までやって来たのだ。

「ん……?」

優奈と男の、目が合った。

「これは……」

しわがれた声である黒フードの男は、優奈の羽を摘み上げる。

「ふむ、我らの作戦を邪魔する者、か」

特に驚いた様子もなく、そう呟いた。

「破滅せよ」

男の声が優奈の耳に届いたかと思えば、優奈はもう 何を視ることも聴くことも、感じることですら出来なくなっていた。粉々になつた黒い蝶の羽が、宙を舞う。

(6) 召喚と破滅、そして召喚。(前書き)

召喚と破滅、そして召喚。

(6) 召喚と破滅、そして召喚。

壮一は一人、黙々とコンピュータのキーボードを打ち続けている。途切れる事なく指が奏でる独特の効果音は、部屋中に響き渡っていた。

3月1日、午前九時。

「只今より、作戦を実行する」

この国のトップ、神山司の声が静まり返ったその部屋に響くと、周りに居た黒フードの集団は、殺風景なその部屋にB73を連れ込んだ。その部屋は、壁も床も天井も全てが白く塗り潰され、中心に天井から吊るしてあるよく解らない機械の他、何も無かった。

黒フード達は、その機械の下にB73を置き、頭に機械で出来た重そうな帽子を被せた。

全ての準備が整うと、黒フードの一人が機械の電源を入れた。どいう原理かは説明出来ないのだが、ゆっくりとB73の全身に巻き付いた包帯が解かれてゆく。B73の力がみるみる覚醒してゆく。。。

通常ならコンピュータ制御のおかげでB73に一切の行動は出来ない様になっていたのだが、しかしB73は自分がたつた今、自分の意思で魔術を使える様になっているのに気付いた。コンピューターの不調子か。とにかくB73の行動は早かった。

「天上に彷徨う別世界の私よ 我の元へ舞い降りて、その羽を再び羽ばたかせん……」

そんな呪文を誰にも聞こえない様に呟く。目の前に霧のような物体が出現した。

(……ユウ……?!)

優奈であったことのあるその精神に、今の状況を理解する事はとても出来なかった。

「優奈、君はまだ死んでしまうわけにはいかない・・・苦しませて  
すまないね」

B73は、ユウは、静かに目を閉じた。すると優奈の周囲は、ま  
るでユウが目を閉じたのと連動する様に、ゆっくりと暗くなってい  
った

優奈の姿が消えたのを見届けると、包帯が全て解けてしまったユ  
ウの意識は薄れ、ユウの力は完全に解放された。

そして世界は破滅した・・・

(1) 意味不明の再会。(前書き)

意味不明の再会。

(1) 意味不明の再会。

精神だけの身体である優奈の目の前に広がるのは、真っ白で殺風景な空間であった。部屋の中心には大きな機械が吊るしてあるが、どうやら今は起動されていないらしい。辺りに、人は居ない。

(・・・?)

先程までは、黒フードの集団や神山というこの国のトップ、そしてユウが居たはずだ。というか自分はある時、偽造した秘密書類のコピーを持って魔術研究室へ忍び込んだのだ。ある男に見つかって、怪しげな術をかけられて・・・そこからの記憶は無い。気付くところの部屋に居ただけだから。

(そうだ、時間！)

生憎あいにくこの部屋には時計という気の利いた物は無く、優奈は扉の鍵穴から外へ出る。初めての場所で何処に何が在るのかも分からなかったが、複雑な通路を適当に進んで行くと、いつしか見覚えのある場所へ辿り着いていた。

先程と同様に鍵穴を通って在る部屋の中に入ると、中では疲れ切った様子の壮一がコーヒー片手にコンピューターをいじっていた。

(壮一！！)

声にならない声を上げ、優奈は壮一の前に出る。

「・・・?」

どうやら精神だけの身体では普通の人間に視る事は出来ないらしく、それでも壮一が目を擦って霞んだ視界を晴らそうとしたのは、壮一に少しでも魔術を扱える力があるからであろう。

それから数度目を擦ってはみたものの、しかし違和感を覚えた壮一は、やっとそれが目の霞みではないという事に気付いた。

「誰だ・・・?」

言いながら、机の引き出しの中からある物を取り出した。何か金属の紐をぐるぐると巻いて作られた、可愛げの欠片ものない人

形。壮一はそれを優奈の前に置き、何かを唱え始めた。すると、まるで優奈とその人形が磁石になったみたいに、優奈の身体はその人形の中へ引き付けられ、辺りが一瞬光ると優奈は人形の中へ入り込んでいた。この経験は、何回目だろう。

「壮一、優奈だよ!!」

「お前・・・何故ここに？蝶の肉体はどうした？」

先程使った、精神と肉体を融合させる魔術・・・壮一の身にはかなりの負担がかかったらしく、頭を抑えながら壮一は問うた。

「よく分からないの・・・」

それから優奈は、極秘書類を入れ替える瞬間に黒フードの男に見つかり怪しげな呪文を唱えられてそこからの記憶が無い事、そして気付いたら黒フード達や神山司に取り囲まれて真っ白な部屋の大きな機械の下に自分とユウが居た事、再び意識が無くなって気付いたら誰も居ない真っ白なその部屋に自分が居た事などを長々と話した。それを聞き終えた壮一は、珍しく驚きの表情を顔に出していた。

「・・・恐らくお前は、あの世界が滅びてしまう瞬間に・・・この世界に飛ばされたらしい」

「え？」

壮一の発言の意味を優奈は理解する事が出来なかった。

「飛ばされた・・・？全く同じ世界じゃない」

コンピューターをスリープモードに設定し、壮一は金属の肉体の優奈に向き直る。

「ちよつと長い話をしようか」

ゆっくりと、語り出した。

「まず・・・、お前は既に一度死んでしまった身だ」

「ふうん、・・・え!!?」

あまりにも平然と言う壮一に、驚く優奈。突然そんな事言われたって、そりゃ驚くだろう。

「お前は書類を入れ替える時に、黒フードに見つかって、呪文によってその身を破壊されたんだろう。・・・つまり、殺された。だから

らすりかえる予定だった極秘書類もそのまま、例の作戦は実行された……。本当はB73の包帯を解くとすぐにコンピューターは起動され、B73に一切の自由は与えられなかったろう。しかし俺のこれまでの作業により、コンピューターの起動が遅れたようだ。B73は包帯が完全に解かれるまでの、自分の力がまだ自由に扱える瞬間を狙ってお前をあの世、つまり天国から召喚した……………」

「……………!そんな、死人を生き返らせる事なんて出来るの?」

(2) 世界の難しい原理って。(前書き)

世界の難しい原理って。

## (2) 世界の難しい原理って。

「ああ、B73の力では不可能ではないだろう。そして彼女は、能力を自らの意思で扱える最期の瞬間にお前をこの世界へ飛ばした。この世界は、お前がミッションを達成させた世界・・・つまり、後は俺のコンピューターの操作次第でこの世界が破滅する事はないだろう」

淡淡と話を続ける壮一の言葉に、優奈はやや混乱気味であった。それを見かね、壮一は少し柔らかい口調で続けた。

「あのな・・・。世界は一つや二つしかないんじゃない。それこそ無限大にあるし、今この瞬間にだって信じられない数の世界が広がり続けている。そしてそれらの世界は、元は一つだったものなんだよ」

「ふ、ふうん」

やはり理解出来ない様子の優奈を冷たく見つめ（いや、もう説明だるくなってきたんだろう）、壮一は突然、飲み残ったコーヒ―を全て床にこぼしてしまった。それも、態わざとである。

「どうやらお前に協力するようになって、俺の魔術の力が上がってきているらしい。つまり、こんな事も出来るってわけだ」

そう呟くと、壮一は目を閉じて呪文を唱え始めた。ユウの様にすぐにはいかなかったが、優奈の周りは段々と暗くなり、やがて辺りが一瞬光って優奈が精神だけの身体となった時には、漆黒の暗闇は少しずつ明るくなり始めていた。

「ようこそ、別世界のお前」

意識が戻ると、優奈の目の前には先程と大して変わらぬ風景がいや、一つだけ違ってある事があった。壮一がこぼした筈のコーヒ―が、床にはなくきちんとマグカップの中で温まっていたのだ。（どうという事・・・?!）

壮一が差し出した金属の人形の中に優奈の精神が宿ると、壮一が

素早く説明を始めた。

「今のは、B73使ったのと同じ、世界移動の魔術だ。・・・世界は元々一つ、これはつまりこういう事だ。

ある二つの橋があるとす。左の橋には向こうに金銀財宝が眠っており、そして右の橋には恐ろしい魔物が待ち構えている。左の橋を渡った者のこれからの人生と、右の橋を渡った者のこれからの人生は全く別のものになるだろうな。

同じ様に説明すると、俺に言われて、偽造した書類を入れ替える事の出来たお前と、それが出来ずに殺されてしまったお前。前者の辿る運命は世界を救って一件落着つてとこだろう。しかし、後者の場合は世界の破滅・・・お前は後者だったが、どういうわけか前者の世界、つまりここへ来てしまったんだな。きつとB73の仕業だろう。もちろん、B73の力が働かずにここへ来る事の出来なかつたお前もいる事だろうが・・・お前は幸運だったんだな」

一通り説明を聞き終えた優奈は目を輝かせ、  
「スケールのでかい話ねえ！」

とても感嘆している様子であった。が、  
「・・・でも私がこの世界に来たのなら・・・この世界って、私がミッションを成功させた世界なんでしょ？だったらもう一人の私が居るんじゃない？」

とにかくそれが気になった。しかし壮一は面白そうに口を歪め、  
「居るかもしれないな」  
なんて言葉を漏らした。

「ただ、さっきの俺がやった世界移動は、向こうのお前とこっちのお前を入れ替えただけ、だから心配すんな」

一息吐いてコーヒーをすすする壮一は、少ししてまた話し始める。  
「世界はな、行動や言動はもちろん、その人の考えている事なんかでも・・・それこそ秒以下の単位の事なんかでどんどんどんどん広がっていつてるんだ。だからこの世界は、お前が最初居た世界と全く違う様に見える、経っている時間は全く一緒なんだ。未来なんて

話じゃない。

お前の居た世界では、特に大きな革命なんてものもなく、お前は普通の高校生として生きていたのだろうよ。しかしここでは戦争の革命が起こってしまい、この有様……」

優奈はそこで、ある点に気付いた。

「高校生、て……。ここにも高校つてあるの？……ていうか、この世界の街並み、私の世界のものとそっくりだったわ」

「じゃあ、この世界はお前の世界と結構最近に分岐したものなんだろうよ。もしかしたら、この世界でのお前が生まれた後に戦争が起きたのかもしれない」

「え！！この世界に、別の私が居る……。！？」

驚く優奈を壮一は冷たく突き放す。

「もしかしたら、の話だろ。街並みなんてそう簡単に変わるものじゃない。むしろこの世界のお前が居ない可能性の方が高いんじゃないか」

「……そうだね、うん」

ここでやっと二人の会話に終止符が打たれた。

(2) 世界の難しい原理って。(後書き)

どうでもいいですが、実は今日(3月3日)ってこの物語の主人公、  
優奈の誕生日だったりします。

詳しくはまた後程出てくると思いますが。

HAPPY BIRTHDAY 優奈

(3) 最後の作業。(前書き)

最後の作業。

### (3) 最後の作業。

「さて、これから俺は最後の作業をしよう。これでB73の意思をコントロールする機械は完全に作動不能になるだろう。後は、そこからどうやって彼女を連れ出すか、だ。また収容室に戻されたんじゃない元も子もねえからな」

壮一は難しそうな顔をしていたが、優奈は明るく言った。

「それなら私に任せて。ちょっと強引だけど、いい考えがあるの」「それは良かった。・・・さあ、お前が居ては気が散る。さっさと出て行け」

そんな言葉を吐く壮一は既にコンピューターの方を向いていた。「ラジャー！」

優奈もスタスタと部屋を後にし、すぐ上の階にある瑠華の部屋へ向かう。しかし階段を上るのは何よりの難関であった。今度の優奈の肉体は、僅か30cmしかないのだ。空間を利用すれば人に見つかり難いし、扉なんか挟まってしまっても金属だからめつたな事では壊れはしないだろう。しかし羽が無いから飛べないし、自分の体重が身長割に重くて困る。一段一段時間をかけて全ての段を上りきると、もうすぐそこは瑠華の部屋であった。

(変ね、外に警備の人が居ない・・・あ、いつも壮一が居るんだっけ)

扉の前まで来た優奈は、扉に全身でアタックした。ガンツという音が辺りに響く。少しすると、何事かと瑠華が扉を開けた。その隙間から優奈は入る。

「壮一・・・」

瑠華はしばらく辺りを見渡し、自分の聞き間違いと思ったのか扉を閉めると先程まで読んでいたらしい本に目を落とすした。優奈は瑠華に見つかりにくい棚の上へよじ登り、その時を待った

午後9：00。

真つ白な部屋には次第に黒い固まりが増え、辺りは異様な雰囲気  
に包まれる。神山司と白い少女が入って来ると、彼らの緊張はピー  
クに達する。

「それでは只今より、作戦を実行する」

司の合図と共に、黒フードの一人がコンピューターの電源を入れ  
た。

(4) 追いかけること睨み合い。(前書き)

追いかけること睨み合い。

(4) 追いかけること睨み合い。

しかし、数分待っても起動しない。

「……………」

その時、控えめに扉が開かれると、外から瑠華が入って来た。

「え……………?!ど、どういう事?」

その姿に司は絶句する。

「瑠華!!何故ここに……………」

「それは私の台詞よツ!!」

時は少しだけ遡り。  
さかのぼ

(そろそろだ……………)

瑠華の部屋の時計を確認した優奈は、棚の上から飛び降りた。金属なので、大きな音がした。

「……………?!」

瑠華は見た事のないその人形を不思議な顔をして見つめる。

「ついて来なツ」

そう叫んだ優奈はスタスタと扉の方へ。

「きゃ!!!」

ありえないその光景に瑠華は声を上げるが、そこはまだ幼き少女である。好奇心に負け、優奈の後を追う。

「ここ、開けて!!」

優奈は扉を激しく叩く。瑠華は言われた通りに開けた。

「さあ、急げツ!!」

ダツと走り出した優奈に負けじと、瑠華は動き難い衣装でありながらも早足で通路を駆ける。

そうしているといつの間にか優奈と瑠華はとある部屋の前まで来ていた。そこで優奈は突然倒れ、まるでただの人形であるかの様に動かなくなった。

「・・・・・・・・・・？ここに入れば、いいの？」

瑠華が控えめにその扉を開くと、そこには黒フード達や謎の白い少女、そして自分の父親である司が居た。

「え・・・・・・・・・・？！ど、どういう事？」

その姿に司は絶句する。

「瑠華！！何故ここに・・・・・・・・」

「それは私の台詞よッ！」

瑠華はそう吐き捨てると、白い少女 ユウへ駆け寄る。

「この子・・・・・・・・・・どうするつもりよ?!」

自分より年上であるユウをかばう様に前へ出た。

「瑠華、B73に近づくなッ」

司は必死に瑠華とユウを引き離そうとする。

「うるさい！！お父さんなんか嫌い!!」

叫びながら瑠華は涙をその目に滲ませる。

「な・・・・・・・・・・お父さんの、どこがいけない？」

多少のショックを受けた司は少しだけ声が甘くなる。

「ここぞとばかりに瑠華は泣き崩れ、

「お父さん・・・・・・・・・・もう、止めてよ。私、別にお父さんがこの世界のトップになっても嬉しくないし・・・・・・・・、土地なんて一つもない。・・・・・・・・私はね、お母さんがいない寂しさが・・・・・・・・世界が手に入る事で紛れると思ってた。・・・・・・・・だけど、さ。そんなの実は全然嬉しくなかったよ・・・・・・・・」

涙を拭って顔を上げ、瑠華は笑顔にも似た表情を出した。

「でもね、今はお友達が出来たから・・・・・・・・私はそれでいいの。

お父さん、お願い・・・・・・・・止めて」

「瑠華・・・・・・・・」

司はまじまじと優奈の顔を見、

「行くぞ」

その場を黒フード達に囲まれ、後にした。

「瑠華、よくやった」

僅かに開いていた扉の隙間からその光景を見つめていた優奈は、  
急いでユウと瑠華しか居なくなったその部屋へ入る。

「ユウ!!!」

ユウの足元へ駆け寄り、嬉しそうに声を上げた。

「優奈、かい？」

「ユウ、私……別世界のあなたがその世界を滅ぼしてしま  
う瞬間に、この世界へ飛ばされたんだよ」

(5) 封印、解放。(前書き)

封印、  
解放。

(5) 封印、解放。

常人では理解出来ないであろうその発言をユウは胸に染み込ませ、「そうだったのかい・・・正直、もう君とは会えないものかと思っ  
ていたよ」

ホッと胸を撫で下ろした。

「どういう事・・・？」

「君はね、この世界では死んでしまったんだよ。魔術師の男が言っ  
ていたよ、蝶の肉体に移った者を殺したってね」

つまりそれは、優奈が極秘書類を入れ替えたとしても結局は殺さ  
れていたという事だ。

「奇跡、だね・・・」

小さな声で優奈が囁く。しかしユウは優しげに、それを訂正した。  
「運命を変える力を、人は奇跡と云うのだろうか？しかし奇跡は一つ  
として特別なモノじゃないんだよ。ほら、今この瞬間にだって誰に  
でも起こっているのだよ。何故なら、奇跡は偶然と偶然が結びつい  
て起こった、ただの偶然なのだからね」

「うん、そうだね・・・」

優奈は素直に受け止めた。

「あの・・・お取り込み中失礼だけど・・・」

先程から状況が掴めぬ瑠華は、不審な表情で二人を見つめる。そ  
りや全身包帯少女と金属の人形が会話しているのだから無理もない  
だろう。

「ああ、先程は助けられてありがとう。私はユウだ」

「え・・・瑠華です」

いきなりの自己紹介。ますますどうしていいのか判らない。

「瑠華、君は神山司の娘だね。君ならこの世界をいい方向へ導ける  
事だろう」

「ありがとう」

少し嬉しそうです。

「申し訳ないんだが……私の包帯を、三分の二程解いてくれないか？」

そしていきなりの要望。

「いいわ」

瑠華は素直にユウの包帯を解く。

「おお、力がみなぎってくるよ、ありがとう」

何の力だ、突っ込みたい気分の瑠華。ユウは優奈に向き直り、

「さて、そろそろ優奈も元の世界へ帰らなければ。君には本当に感謝しているよ。きつい事を頼んでしまって悪かったね」

そう言った。

え、そんなあっさり?!

(1) 別れ。もう戻れない・・・(前書き)

別れ。もう戻れない・・・

(1) 別れ。もう戻れない・・・

「ちょっと待ってよ！私、もうちょっとここに居るー！」

「駄目だよ。お母さんが心配してる」

「お母さん・・・？そーいや、ユウの家族は？」

何とかここに留まりたいがためにそんな事を訊いてしまい、優奈は少し後悔した。ユウが俯いてしまったからだ。

「私は生まれた時からこの莫大な魔力を持っていてね・・・成長するにつれてその力は様々な悲劇を生むようになっていたよ。そしてついに、自分の父親をこの手で殺めてしまった。それも、私が眠っている間に、だよ。」

・・・次は自分が殺されるんじゃないかと恐れた母親は、私を特殊な包帯で縛り、どこかへ逃げてしまったんだよ

「そんな・・・」

「包帯はね、私が成長するにつれて解けていったよ。私がどんなに無理やり解こうと思っても解けぬその包帯が私の成長と共に解けてゆくのは怖かったよ。私の力がどんどん大きなものになっているって気がしてね・・・」

「ごめん、悪い事訊いちゃった」

優奈は何も聞いてない、とでも言う様に自分の耳を塞いだ。

「・・・ふお」

瑠華はこの場の空気に耐えられず意味不明な言葉を漏らす。

「そんな事はいいんだ。もう帰る準備はいいね？」

優しくユウは話しかける。

「え・・・、また、ここに呼んでくれるよね？」

涙声で優奈は上を見上げる。

「それは無理だ。私はもうするべき事をしたし、別世界の者をもつこれ以上巻き込むわけにはいかない。君も元の世界で自分のするべき事があるんだろう？」

ユウは、自分にもそう言い聞かせていた。  
「うん……」  
残念そうに優奈は頭を下げた。と、その時。

(2) 共生している魂は。(前書き)

共生している魂は。

(2) 共生している魂は。

「待て、俺も戻せよ」

「壮一が入って来た。」

「え!？」

「驚く優奈と瑠華。ユウは顔を動かし、

「ほう、君は……」

くすりと笑った。

「どうやら彼も、優奈と同じでこの世界の者ではないらしい」

「そうなの……?!でも、肉体……」

「壮一の肉体は、完全な人間そのものである。」

「ああ。俺の中にはな、二人分の魂が宿ってんのさ。一つ目はこっちのもんで、執事だ。もう一つは俺。向こうの世界の、ただの高校生だ」

「だからだ。だから、こんなにも性格が変わったのだろう。」

「壮一……!？」

「何より驚いたのは瑠華である。普段壮一はこんな口調ではないのだから。」

「何でしょう、お嬢様!……久しぶりに喋りました」

「あのなア、出てくんじゃねえよ執事」

「はい?これはもともと私の肉体なんですが」

「知るかよ」

「一つの肉体で二つの精神が口喧嘩している。それはまるで何かの漫才のようでもあった。」

「まー、いいから戻せって」

「最終的に執事でない方の壮一が口を開く。」

「えと……どうしてそんな事に?」

(3) 二人の少女の真実。(前書き)

二人の少女の真実。

(3) 二人の少女の真実。

優奈の質問に対する壮一の答えはやたら長かったのでまとめると、向こうの世界での壮一は普通に高校生であったが、母親が少し魔術を使う事が出来た。ある日車に撥ねられそうになった壮一を、母親は精神だけでも生きてくれと別世界へ飛ばした。しかし現実には車が間一髪のところまで壮一を避け、しかし精神が無くなった向こうの世界の壮一は意識が戻るわけもなく。飛ばされた壮一の精神は、元の世界へ帰る方法を知らない。たまたまこの世界での壮一の姿を発見し、乗り移ったのだという。以来こうして一つの肉体に共存していた。

ちなみに母親の血を受け継いで壮一も少しは魔力があるそうだが、本当に少ししか使えなかったため、金属で作った別の肉体に魂を切り離して入れる事は出来なかった。

「とうわけだ。でも今やB73が居るからな」  
満足げにそう言った。

「じゃあ、どちらから戻そうか」

「私から!!」

あれ程元の世界に戻りたくないと言っていた優奈が声を上げた。

「早く帰ってお母さんを安心させないとッ」

元気にそう言ったが、目には涙を滲ませている。

「優奈……別れだね」

「うん。絶対にユウの事、忘れないよ」

ユウが目を閉じた。優奈の辺りが一瞬光り、精神だけとなった優奈の意識は次第に薄れゆき

「ユウ、いや……優奈。さようなら」

優奈はそう言い残して姿を消した。

驚いたのはユウである。

「どうして私の正体が分かったのだろうね」

言いながらピエロのお面を外す。現れたのは紛れもなく優奈の顔であった。

「私は、この世界の優奈。あの世界の私が、私の正体を知ってしまったのは色々と面倒な事になると思ってるね。名前と顔を偽っていたのだよ」

「ふうん、こんな顔なんだ」

壮一が呟く。今まで彼女の顔を見た事はなかった。

「あいつ今までくまのぬいぐるみやら蝶やら人形やらの肉体の中に入ってたさ、本当の人間の肉体持つてるとは思わなかったな」

瑠華は、壮一その言葉に反応する。

「くまのぬいぐるみ?!それって、私の!?!」

「ああ、そうだよ。お前がいつも連れまわしてたから中々思い通りに事が進まなかったみたいで、見ていて面白かったよ」

思い出し笑いをしながら壮一は言った。

「あ、ごめんなさい……」

瑠華は顔を赤らめた。

「さあ、そろそろ君も戻ろうか」

優奈が囁いた。

「おう」

「早くして下さい、優奈さん」

一つの口が交互に物を言う。

再び優奈が目を閉じ、辺りが一瞬光る。

(じゃあな、執事)

「お元気で」

二人が同時にそう言い、すぐに片方の壮一は姿を消した。

「……行ってしまったね、皆」

瑠華は少し悲しそうだ。

「瑠華、これからは君がこの国を造っていかなくっちゃ。お父さんが破壊したものは、娘である君が直す、そうだろ?」

「うん!」

瑠華の目に活気が宿る。

「さあ行きましょー」

一流執事の壮一は、瑠華と優奈の背を押して優しく声をかけた。

## エピローグ（前書き）

いよいよ終わりですな・・・。

## エピソード

「うーん……」

永い夢を見ていた気がする。気づくと自分はふわふわのベッドの上で寝ていて、お腹を空かせていた。

「優奈、ご飯よ」

母、香織がお粥を持って来て。

「ゆッ！！優奈……！！！！」

驚いた様な、嬉しそうな表情で駆け寄った。

「お母さん……いっぱい心配かけてごめんね」

優奈と香織は強く抱き締めあつた。

「優奈……、朝食は何かいい？お母さん何でも作ってあげるわ」

しかし優奈は首を振り、

「ううん、そのお粥がいいの。お母さん、私が寝ている間も食べさせてくれてたんでしょ」

にこりと微笑んだ。

「優奈、今日はお母さん、休みをとっちゃうから！どこへ行きたい？」

以前香織が優奈にそう言った時は、優奈は冷たく香織を突き放したはずだ。しかし優奈は、

「んーとね、新しい服、買いたいの」

少し迷って、そう答えた。

「そう、お母さんがどれでも買ってあげるから」

「えー、高いのだったらどうすんの？」

「ふふっ、どうしよっかなあー」

親子の会話を二人は時間を忘れて楽しんだ。

「へへ、いっぱい買った」

両手に大きな紙袋を持ち、親子二人は帰り路についていた。まだ人だかりは多く、様々な人が歩道を行きかっている。そんな中で、優奈はある一人の人物を見つけた。

「あ、そっい……」

壮一、本人であつた。しかしその人物は優奈をちらと見ただけで、仲間と馬鹿話をしながら去って行った。

（いや、あの人はこの世界での壮一、か。あの壮一はきっと、また別の世界の住人なんだろうなア）

そう考えながら歩を進める。

「優奈、お母さんこれから少しずつ優奈と過ごせる時間をつくっていくからね」

「うん！」

幾つもの世界に、奇跡が起きた

f i n .

## エピローグ（後書き）

ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました。  
よかったら感想とか書いて頂けると参考になります。  
キャラクターの個性が出るように頑張りましたッ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2094r/>

---

世界の絆

2011年3月13日16時40分発行